

大坂なおみの現在

—2022年テニス全豪オープン選手権観戦記

大坂なおみ選手は全豪オープン3回戦で敗退した。第2セット終盤でマッチポイントを握ったにもかかわらず押し切ることができなかった。昨年の全米オープン3回戦のフェルナンデス戦と同じである。この時も、第2セット終盤で相手のサーヴィスゲームをブレイクして、自分のサーヴィスゲームをキープすれば試合を終わらせることができたのだが、そこから逆転負けを喫してしまった。

本人は練習不足なのか、それとも実戦不足なのか分からないと言っているが、現在の自分に何が足りないのかを分析できていないように見える。これはコーチの責任とも考えられるが、大坂選手の性格上、納得できないことは受け付けないだろうから、コーチとのコミュニケーションが十分にできていないのかもしれない。昨シーズン、実戦から遠ざかると決めた大坂は、コーチやトレーナーとの相談なしで決断したと話している。だから、やはり大坂自身がどれほどのモチベーションをもって実戦に復帰したいのか、何を達成するために、どこをどう克服すれば良いのかについて明確な自覚と確信を持たないと、コーチの指示を受け止めることはできないだろう。

全豪オープンを見る限り、大坂選手の状態は全盛期の8割程度である。身体能力が高いので、この程度の仕上がりでも勝ち進むことはできるが、調子が良い選手を相手にすると苦戦する。とくにアニシモヴァのように、体格が大坂とほぼ同じで球に力がある選手が100%の調子でぶつかってきた時に苦戦する。大坂選手にはまだまだ伸び代（しろ）がたくさんある。それを確信し、伸び代（しろ）を自分の物にしていけるかどうか、今後の大坂選手の選手生命がかかっている。

サーブの現状

大坂の最大の武器は男子並みのスピードがあるサーブだが、問題はその確率である。ふつうファーストサーブの確率はほぼ50-60%で、簡単にサーヴィスゲームが取れるわけではない。剛球サーヴァーは往々にして、突然に調子を崩し、それが敗退の原因になる。

2020年の全豪3回戦で大坂を破った15歳の天才少女ガウフは、この試合で190kmh前後のファーストサーブを連発し、セカンドサーブのスピードも160kmhを記録していた。男子選手並みのパワーである。しかも、第1セットのファーストサーブの確率が80%を超えていた。第2セットのサーブ確率は落ちたが、要所で速いセカンドサーブを決められ大坂は敗退した。センセーショナルな敗退になったが、この試合のガウフには誰も勝てないだろう。こういう相手と対戦する場合、大坂も100%の力を発揮しなければ勝ちきることはできない。

大坂を破ったガウフだが、次の4回戦でケニンに敗れた。その試合のガウフのファース

トサーヴの確率は56%に落ち、エース7本にたいしてダブルフォルト7本だった。サーヴの調子がふつうの状態に戻ったのである。もっとも、当時のケニンは調子が良く、そのまま全豪の初タイトルを獲得した。

このように、いかに強力なサーヴを持っていても、サーヴの調子は日によって異なるし、同じ試合のなかでも変化するから、サーヴ力だけに頼って試合に勝てない。その後、ガウフはダブルフォルトを重ねるイップスに陥った。サーヴ力のある選手が陥る問題である。これを克服するために、ファーストサーヴのスピードを抑え、コントロールに重点を置くサーヴに転換している。その結果、ガウフのサーヴにはデビュー当時ほどの脅威がなくなった。

幸い、大坂はイップスに見舞われていない。しかし、第一級のスピードをもつファーストサーヴに比べて、セカンドサーヴは並みのスピードに落ちる。対アニシモヴァ戦のデータを見ると、大坂のファーストサーヴの平均速度は178kmh（最高速度197kmh）であるのに対し、アニシモヴァのそれは166kmh（最高速度179kmh）である。これがセカンドサーヴになると、大坂が136kmh、アニシモヴァは149kmhと逆転する。

この結果、アニシモヴァが11本のサーヴィスエース（ダブルフォルト8本）をとったのに対し、大坂はわずか5本（ダブルフォルト3本）にとどまった。サーヴィスエース数で大坂が相手に負けることは稀なことだが、さらにセカンドサーヴでのポイント取得率が5割前後で、アニシモヴァ6割に及ばなかった。サーヴ力で相手を圧倒するという大坂の戦いができなかったのである。

大坂のセカンドサーヴが課題であることは本人もコーチも認識しており、ボールに回転をかけて、跳ねるサーヴに取り組んでいる。ただ、この跳ね上がるサーヴの場合、中途半端な高さに跳ねると、相手の打点ポイントに入ってしまう。パーティのセカンドサーヴのスピードは大坂と変わらないが、左右のコーナーにボールを散らすコントロール技術があるから簡単に叩かれない。今のところ、大坂にはこの技術がない。

昨シーズンの負けゲームは、例外なく大坂の最大の弱点であるセカンドサーヴを叩かれたものだ。今大会では跳ね上がりを大きくするように回転数を高くなるようにしていたが、それでも相手の打点近くに落ちると叩かれる。アニシモヴァにはセカンドサーヴを叩かれただけでなく、180kmhを超えるファーストサーヴも切り返されている。

大坂のサーヴの課題は、ファースト、セカンドともに制御力を付けることだ。これは練習しかない。すでにフォアサイドで外に切れるサーヴを習得しているから、反復練習を重ねてフォアサイド、バックサイドともにコーナーを攻める制御力が求められる。制御力が付くまでは、セカンドサーヴの回転数をさらに上げるか、スピードを付ける以外に改善方法はない。

ストローク力

対アニシモヴァ戦ではストロークでも劣勢に立っていた。アニシモヴァのウィナーが46

本にたいし、大坂のそれは 21 本である。全盛期の太坂であれば、この数字が逆転しているはずだが、簡単なストロークミスが多かった。

太坂はバックハンドスライスに取り組んでいると伝えられていたが、私が観戦した 2 回戦と 3 回戦でバックハンドスライスは 1 本も使っていない。サーブと同様に、太坂の魅力はラケットを振り切る強烈なストロークにあるのだが、遊びのないパワーショット一本槍は単純なミスを誘発しやすい。ほとんどの選手は振り切ることができない難しいボールはスライスで返し、ストロークを繋ぐ。最近のパーティはバックハンドをほとんどスライスで返している。太坂と対照的である。

不利な体勢からパワーショットを打っても、返球の確率が低い。それでも太坂はスライスを使うことはない。しかし、スライスはたんに逃げのショットではない。球が沈むので、相手に強打されない利点がある。さらにスライスは次のショットの繋ぎという意味だけではなく、ストロークに変化を付けるという意味でも重要だ。ドライブで来るのか、スライスで来るのか、それともフラットで来るのかを相手に読ませないのだ。球筋を変えることで、相手に的を絞らせない。まさにフェデラーが使っていた戦法である。

これは野球の投手と同じで、どれだけ球速が速くても、打者のツボに投げてしまうと打ち返される。だから、多くの球種を使って、打者のタイミングやツボを外すのである。テニスも同じで、どれほど打球が速くても、一本調子で打っていたのでは相手に対応されてしまう。球筋に変化を付けて相手に的を絞らせない技量が必要なのだ。

パーティの場合、バックハンドドライブは両手で打ち、スライスは片手で打つ。両手打ちのアニシモヴァもスライスは片手で打つ。ところが、太坂はもともと器用でないから、両手ドライブと片手スライスを使い分けするようなストロークができない。しかし、テニスのプレイ幅を広げていかなければパーティに勝てないし、台頭する若手を一蹴することもできないだろう。

スライスとともに、ネットプレイの向上に取り組んでいると言われる太坂だが、その成果はまだ見えない。ネットプレイも器用さが要求されるから、太坂が苦手にするところだ。しかし、もう不器用だなどと言っている暇はない。それができなければ、トップへの振り返りはない。

サーブレシーブ

全米フェルナンデス戦でも見られたことだが、それほど威力のないサーブのレシーブ力に問題がある。ストロークと同様に、太坂はレシーブにおいても、スライスやブロック（ラケットを振り切らず、フラットに当てるだけで返球）を使うことはないし、実際にも使ったことがない。

確かに、2019 年の全豪、準決勝対プリスコヴァ戦、決勝対クヴィトヴァ戦で、強烈なサーブを強打で切り返し、見事優勝した。この時のような攻撃的なレシーブが次々に決まればスライスやブロックなど必要はないが、あのような神懸かり的な対応が常時でき

るわけではない。勢いで制した優勝から、今度は安定した戦いができるようにプレイの幅を広げていかなければ、四大大会勝利をさらに積み上げることはできない。それは大坂選手だけに言えることではなく、すべての選手に言えることだが。神懸かり的な勢いで四大大会優勝を達成した選手はたくさんいる。しかし、多くの選手は2勝目を達成できずに終わってしまう。今のところ、若手で複数回の四大大会優勝を達成しているのは、大坂とバーティだけである。それだけでも素晴らしい成績なのだが、大坂選手がどれほどプレイに幅を持たせることができるかで、これからのテニス人生が決まる。

大坂選手の最大の敵は自分自身である。弱点を克服したいというモチベーションを持つことができるかどうか。それにかかっている。伸び代はある。